SDGsを身近な問題として捉える

SDGsはグローバルな問題だが、一人ひとりが自分事として捉え、小さな解決策であったとしても、できることから実行に移すことが大事だ。

東京都の女子校、東京家政学院では、高校一年次、高校二年次に「SDGs探究プログラム」に取り組んでいる。地球視点に立ってグローバルな課題を自分事として捉え探究する学習を行っているのだが、高校一年の入口では、SDGsを題材にしたカードゲームを行うことから始めている。

「カードゲームを通してSDGsの世界観を捉え、国際的な課題と自身の生活の関わりを理解することが大事だと考えています。『なぜSDGsが必要なのか』『SDGsによってどのような可能性があるのか』などを体感することを目的に行っています。生徒たちは、ゲームの内容をしっかりと理解し、ゲーム内での世界の状況を考えながら各班で協力して与えられたゴールに向けて取り組むことができます」と入試広報部長の山形純一郎先生は言う。カードゲームという生徒たちにも取り組みやすい形で学習を進めるのは良い方法だ。

一方、中学生においては、キャリア教育の一環として行っている「ポスタビ」の中にSDGsの観点を取り入れている。

ポスタビは学校周辺の企業や商店などを取材して、自分たちで撮影した写真にキャッチコピーをつけてポスターをつくる活動だ。地域で働く大人の情熱をいかに伝えるかという工夫をする中で、単なる職業調べではないキャリア教育を実践している。

生徒たちは最終的に、このポスタビにおける経験をSDGsの一七のゴールのいずれかに紐づけて振り返りを行い、全校プレゼン大会（GPA）で発表している。そのことにより、SDGsが必ずしも世界的な大きな課題なのではなく、自分自身で取り組める身近な課題なのだということを実感してもらうことができる。

グローバル課題というと、どうしても大きな問題だと感じて尻込みしてしまうが、こうやって身近な活動と結びつけて考えると取り組みやすくなる。東京家政学院のSDGsの取り組みは、その良い事例だろう。